結末を知らない物語　第二部

中沢　央

フェニール（三十）
職人階級出身。一つの虚偽の証言で、美しい容姿と演技力で多くの人を魅了した役者は「フェニール」という役を演じていかざるを得なくなった。

カリーナ（秘密）
労働者階級出身。元娼婦。孤児院育ちだが、そこには何故か十三歳までの子供しかいなかった。

アウヴィス（三十二）
貴族階級出身。火掻き棒を押し当てられた手で書いた離縁届は、血塗れになった。濡れ衣で姓も家族も身分も失った男に残されたのは、復讐心だけだった。

フィエルテ王国には四人の王子がいる。第一王子ジェーソンは正妃の子供で、順当にいけば王位はジェーソンに継がれる予定だ。第二王子推進派の有力貴族、ガイザック父子が第一王子を廃さんと画策した疑いで捕縛されたのは、八年前のオルホート歴一六七二年のことだった。

尋問は、首謀者とされた父親のファセラン＝ガイザックの目の前で、息子を拷問するという凄惨なものだった。ファセランが自白したときには、息子のヒュースレンは体中血塗れなのはもちろんのこと、手のひらまでも焼き爛れていたと言われている。

カリーナが仕えるサルデン＝リグレーは第二王子派閥の貴族だ。

カリーナの仕事は、サルデンの政敵の屋敷に侵入し、情報を集めることだ。今は、第一王子派閥のギルベイン＝キュリオスの屋敷に下働きとして潜入している。

「早く料理を運んでおくれ！」

「はい、ただいま！」

今宵は、普段よりも慌ただしい。屋敷で社交パーティーが開かれていて、普段より多くの量の夕餉を用意しなければならないからだ。

厨房係の下働きでは、手に入る情報にも限りがある。しかし、カリーナには、女にしか使えない手段がある。

パーティーに招かれているのは、第一王子派閥の人間だけだ。今回の標的は、すでに決めてある。

「オルスト伯の家令、ルビンは女好きで有名だ」

そう語ったのは、共にサルデンに仕えているアウヴィスだ。

「平民だろうが夫人だろうが手を出すのが早いらしい」

「いくつぐらいの人なの？」

アウヴィスは思い出すように、宙に視線をやった。
「確か、三十は過ぎているはずだな。正確な年齢は知らないが、私たちと、そう歳は離れていないはずだ」
会食が終わり、主人が客人と遊興に興じ始めた頃、厨房の仕事も一段落着いた。遅い夕餉を早々に食べ終えると、カリーナは他の厨房係たちに声をかけた。
「一足先に失礼します」
「あら、もう寝るの？」
「これから皆でカードをやろうとしていたんだけど」
カリーナは微笑んだ。
「ありがとう。でも、疲れてしまったから先に寝るわね」
誰も後をつけてきてないことを確認しながら、足早に客人の部屋を目指す。ここは、来賓の間から客人の部屋に行くときに必ず通る廊下だ。ルビンがいつ頃部屋に戻るか分からないが、物陰に隠れながら待ち続ける。
誰かに見られないかという緊張感の中で待っていたせいで、どのくらいの時が経ったのか分からないが、若草色の髪の男が近づいてくるのが見えた。あれがルビンだろう。カリーナは物陰から出ると、襟元を大きく動かし扇いだ。まるで、忙しく働いた後で、火照った体を冷ますように。ルビンは近寄って来るだろうか。
「お嬢さん、そこで何をしているんだい？」
背後から声をかけられ、カリーナは肩を震わせた。目を丸くして、胸元をはだけさせていた姿を見られたことを恥じるように、手で胸元を強く押さえた。胸がつぶれて、豊満さが強調されている。
「……はい」
恥ずかしがるように、視線を下に落とす。ここまでは上手く事が運んでいる。視線を落としつつも、ルビンが自分の胸元を見つめていることにカリーナは気づいていた。
「君はメイドだろう？　何の仕事を担当しているんだ？」
「厨房係です」
「厨房係か。今宵は大変だっただろう」
カリーナは顔を上げた。
「大丈夫です。少し、疲れてしまったけれど」
「そうだな。白露の月とはいえ、忙しなく働いていれば暑くもなるだろう」
カリーナは再び視線を落とした。そうすれば、恥ずかしがっているように見えるだろう。
「どうだ、今宵は普段より質の良い寝台で眠りたくないかい？」
カリーナは内心ほくそ笑んだ。上手くいった。
カリーナは胸中を悟られぬよう演技を続ける。
「えっ」
「嫌かい？」
「いいえ」
カリーナはぎこちなく頷いた。

「私で良ければ」

寝物語では、様々な情報が手に入る。

伯爵夫人の不倫話、屋敷の人間関係、お家騒動の話、果ては市井の噂話など。

自分の動きによって相手が気持ちよくなっていると、思わせることが重要だ。客を気分良くさせる方法、興奮させる方法は娼館にいるころに、嫌というほど学んだ。

カリーナは――その頃は別の名前だったが――は、八歳で唯一の肉親だった母を亡くし、道端で物乞いをする日々が続いた。ある時は民家の軒先で雨をしのいで家主に叩きだされ、またある時は泥水をすすった。

いつものように、往来の人々に食い物をせがんでいた時、ある一人の女が足を止めた。

「あら、可哀そうに。良ければ、私の家に来るかい？」

四十近くに見える、ふくよかな体形をした女だった。カリーナに選択肢は無かった。カリーナが連れてこられたのは、孤児院だった。確かカリーナも含め、多いときで十五人くらいの子供たちがいたような気がする。

孤児院で過ごすうちに、カリーナはシェリカという名の少女を姉のように慕うようになった。シェリカが、孤児院を後にすることが決まったのは、彼女が十四歳になったばかりの頃だった。

「私の働き口が見つかったんだって」

シェリカが孤児院を発つ前夜、カリーナはシェリカと夜通し、声を潜めてお喋りをした。

「これからは自分でお金を稼いで生きていくの。そして、お金を貯めて、皆のような孤児の子を引き取るんだ」

「私のことも引き取ってくれる？」

シェリカは声を殺して笑った。

「私がお金を貯めるより先に、貴方もここを出ていくわよ」

カリーナはシェリカの二歳年下だった。

「シェリカ、元気でいてね。貴方のこと、忘れないよ」

シェリカは優しい笑みを浮かべた。

「私もよ。――そうだ」

シェリカは右腕につけていた赤いブレスレットを外した。カリーナは青いブレスレットをつけている。二人で作ったものだ。

「ブレスレット交換しない？　いつか、外で再会したときに、お互いのものを返すの」

カリーナは目を輝かせて頷いた。まるで、おまじないのようで、シェリカと再会できるような気がした。

「うん！」

あの時、シェリカもカリーナも子供だった。何故、孤児院には十四歳以上の子供がいなかったのか、分からなかったのだ。

カリーナが孤児院を出ていくことが決まったのも、十

四歳の時だった。
カリーナが売られたのは、小さな娼館だった。売られて初日に、カリーナは客を取らされた。
泣きながら拒絶するカリーナを、客の男は殴った。
「金を払っているんだから大人しくしろ！」
カリーナは恐怖のあまり抵抗することができなかった。客の手と舌が身体を這うたび感じていた、身の毛が逆立つほどの気持ち悪さは今でも思い出せる。
サルデンが娼館に来たのは、それから七年ほど経ってからだ。
「私の下で働かないか？　身請けをしてやろう」
その時にも、カリーナに選択肢は無かった。
カリーナは、男と身体を重ねる度、自分の心に穴が開いたように虚しさが広がるのを感じていた。ことに及んでいる間は、自分の感情に蓋をしていると言った方が正しいのかもしれない。
昔、想い人と身体を重ねる時ほど幸福な時は無い、という一文を小説で見つけたことがある。カリーナはまだ、想い人と結ばれたことがない。十代の頃から体を売って嫌というほど様々な客を見てきたきたカリーナにとって、男は軽蔑する対象だった。
ことが終わると、カリーナは疲れ切ったように深く息を吸いながら、目をつむった。
「すごく気持ちよさそうだったな」
カリーナは胸が冷え切っていくのを感じた。演技をしていることに気づかないなんて、馬鹿な男だ。動きを激しくしておけば、相手は気持ちよくなると勘違いしている。
「ええ。――凄かったわ」
カリーナは内心ルビンを馬鹿にしながら、目を細めた。
視線をずらすと、本棚が目に入った。その中の一冊の本の題名を見て、カリーナは瞬きした。最近、どこかで同じ題名の本を見たような気がする。
「……エーレンベル？」
ルビンはカリーナの視線の先に気づき、頷いた。
「ああ、戯曲だな」
ルビンは口角を上げた。
「私は観劇も好きでね。エーレンベルの芝居も観たことがある」
カリーナは頬杖をついた。
「観劇？」
「ああ」
ルビンは肩をすくめた。
「美人がたくさん見られるからね」
カリーナは内心呆れながら、苦笑した。
「あら、じゃあ観劇が好きなのではなくて、女優を見るのがお好きなんですね？」
「まあ、女優を見るのが一番の醍醐味だが、演技に感動

することが無い訳ではないさ。そうだな」
　ルビンはカリーナの顔を覗き込んだ。
「ドルチェグスって行ったことあるか？　豊穣のカーニバルで有名な」
　カリーナは首を振った。
「無いけど、地名は知ってはいます」
「数年前、エディオン様（オルスト伯）がカーニバルを見にドルチェグスへ行ったんだが、そこで劇を見てさ。もう、主演俳優の演技が凄くて凄くて！　あの時ばかりは女優じゃなくて主演俳優の演技に見入ってしまっていたね」
「まあ」
　女好きの男がそこまで言うのなら、よほど凄い演技だったのだろう。
「何ていう劇だったのですか？」
「夢で見た物語」
　ルビンは気分が良さそうに話を続ける。
「主演俳優も女優も、絵に描いたような美男美女でさ。美人だったのに、あの劇だけは主演俳優の方ばかり見てしまった」
　ルビンの話に耳を傾けながら、カリーナは先ほどの題名の本をどこで見たか思い出していた。フェニールの部屋だ。ここに来る前アウヴィスと、フェニールの部屋で飲んだが、その時に見たのだ。そういえば、フェニールも背が高く、顔立ちも、女性が惚れ惚れしそうなほど整っている。フェニールも観劇が趣味なのだろうか。
「女優の方より俳優の方が印象に残るなんて」
　一体何という名前の俳優なのだろう。今も役者を続けているのだろうか。
「何て名前の俳優だったのですか？」
「たぶんアンデリートって名前だったと思う。女性の観客たちが、カーテンコールの時にそう叫んでいたから」
「知らない俳優ですわ」
　もとから、カリーナは役者には興味がない。ふと、カリーナは自嘲気味に笑った。役者たちだって、誰かと寝る時の快楽に溺れる演技をしたとしても、娼婦には劣るだろう。
「ギルベイン様たちもお休みになったかしら？」
「まだだろう。家令も人払いして話し合うことがあるみたいだからな」
　カリーナの関心は、一気に主人たちの会話の内容に移った。
「どのご夫人が綺麗だったとか、そんな話をしているのかしら」
　カリーナはわざとおどけたように言った。
「馬鹿だな。そんな話なら、家令の前でも喋るさ」
　無知のふりをすれば、多少踏み込んだ話をしても相手の警戒心が解ける。カリーナはルビンの胸に手を添えた。

「では、どんな話をしているのかしら？」
「そうだな……メイドに話しても分からないだろうが、おそらくサーシャ様とフェレイラ様の話でもしているんじゃないか」
「どなた？」
カリーナは嘯いた。サーシャは第一王子の正妻で、ギルベインの長女のはずだ。ギルベインは、ガイザック家の策略を阻止した功績が認められ、第一王子と姻戚関係を結んでいた。そして、フェレイラは王妃で第一王子の母親だ。王宮では臣下たちの権力争いだけでなく、正妻や妾、妻と姑の争いも起こる。
ただの妻姑問題の話をしているのか、それとも何かを企んでいるのか。カリーナの思考は、ルビンの動きによって遮られた。
「さあ、もう一戦といこうじゃないか」
ルビンの身体が覆いかぶさってきた。

※

フェニールはニルスト領、アージェンの教会を訪れていた。アージェンを訪れた目的は、ある賭博場に忍び込むためだ。賭博場は夜にだけ開かれるが、今は昼前だ。
教会に通うようになったのは、サルデンに仕えるようになってからだ。フェニールの主な仕事は潜入調査だが、時には自身の手を血に染めることもあった。教会で祈りを捧げ、懺悔するだけで自分の罪が許されるとは思えないが、神に許しを請わずにはいられなかった。
今回はフェニール自身が手を下したわけではないが、無関係とも言い切れない。仲間のアウヴィスが、タートス伯お抱え商人の下男を殺したのは、最近のことだ。ティモールの部下の中で誰が懐柔しやすいかアウヴィスに教えたのは、フェニールだった。金をちらつかせれば、下男は暗殺話にのった。主人を服毒自殺に偽造して殺した後、下男は死という褒美をもらった。
司祭の祈りの言葉が教会に響く。
フェニールの本名はアンデリートだ。アンデリートは五年前まで劇団で主演俳優を務めていた。
アンデリートにとって、演技をすることは、この上なく楽しいことだった。劇の登場人物になりきり、まるで自分の想いのように台詞を紡ぎ、言葉だけでなく表情や動きでも演技をした。
観客の歓声と、鳴りやまない拍手。舞台の上で沢山の賞賛の声を聴く時の身を震わせるような快感は、女を抱いている時のものと比べ物にならなかった。アンデリートが演劇の世界から立ち去らなければならなくなったのは、アンデリートが主演女優に想いを寄せたことがきっかけだった。
舞台の上ではないが、今もアンデリートは役を演じて

いる。自分は一体いつまでフェニールを演じていかなければならないのだろう。
今まで様々な役を演じてきた。どの役も、結末は脚本に書いてあった。
しかし、フェニールという役の物語には、脚本がない。
アンデリートは、結末を知らない物語でフェニールという役を演じている。
この役を降りることはできない。監獄に戻るくらいなら、感情を殺して物語を続けていた方が良い。
司祭と礼拝者の祈りが終わった。
祈りが終わると、礼拝者たちはぞろぞろと帰り支度を始めた。
アンデリートも立ち上がると、教会の出口に向かって歩き出した。
「あの……」
ふいに後ろから声をかけられた。振り返ると、成人したばかりに見える、大きな瞳の娘が立っていた。年頃の娘らしく、頬に少し吹き出物ができているが、それがかえって娘の若々しさを表しているようだ。
「……どうされました？」
「……」
娘は何も言わない。ただ、呆然としたように立っている。さすがのアンデリートも眉をひそめ、怪訝な感情を露にした。何の目的で声をかけたのだろうか。
「すいません、これ」
娘はハンカチを差し出した。
「落としましたよ」
「ああ」
娘の意図が分かり、アンデリートはやっと表情をやわらげた。
「ありがとうございます」
アンデリートは礼を言うと、そのまま立ち去った。

※

その頃、サルデンはベアトリッツ＝ニルストの屋敷を訪れていた。
ベアトリッツは第二王子の叔父にあたる。サルデンはベアトリッツと、妻のグレアに頭を下げた。
「此度はお招きいただき、ありがとうございます」
ベアトリッツはサルデンに腰かけるよう勧めると、傍らに立つ妻に視線を向けた。
「私たちはこれから話がある」
グレアは何も言わず、サルデンに会釈をすると部屋から出ていった。
妻が部屋から出たのを確認してから、ベアトリッツは口を開いた。
「ティモールが亡くなったそうだ」

ティモールはタートス伯のお抱え商人だ。
「ほう」
サルデンは嬉しそうに口角を上げた。
「吉報ですな。ティモールは我々サロンド派（第二王子派閥の名称。筆頭貴族ガイザック家の領都の名称からつけられた）とも繋がりがあったそうですし、奴が消えればこちらの情報が敵に知られる虞も低くなるでしょう」
サルデンは首をかしげた。
「ところで、何が原因で死んだのでしょう」
「自死らしい。何でもタートス伯が経営する会社に損失を与えてしまったそうだ」
「なるほど。タートス伯の財力も削がれ、吉報は二つあったという訳ですな」
「ああ」
ベアトリッツは頷きながらも、険しい顔を崩さなかった。
「しかし、これで喜んでいる場合ではない。デリシア派（第一王子派閥の名称）の勢力は未だ健在だ」
ベアトリッツは片手で頭を抱えた。
「せめてヒュースレンの消息が分かれば……」
ガイザック父子に下された判決により、ファセランは死罪、息子のヒュースレンは下層階級に落とされた後晒し刑になった。晒し刑の後、ヒュースレンは人身売買を専門とする店に売られていったらしい。しかし、その後の消息は掴めないままだ。
ベアトリッツにとって、ファセランは良い友人だった。赤子だったヒュースレンを抱き上げたこともある。
「見てくれ、ベアトリッツ。私たちの息子だ！」
そう言いながら赤子を抱き上げていたファセランは、本当に嬉しそうだった。
「ヒュースレンと名付けたんだ」
「ヒュースレンか。良い名前だな」
腕の中のヒュースレンは寝息を立てていた。
「この子には、幸せな人生を歩んでもらいたい。どうか、この子に明るい未来が待っていますように」
ファセランの願いは、二十四年後に打ち砕かれることになった。
「ヒュースレン殿が生きていれば、濡れ衣を晴らせる望みが高まりますからね」
サルデンの声で、ベアトリッツの意識は過去から引き戻された。ベアトリッツはサルデンを見据えた。
「ヒュースレンの消息について、何か情報を持っていないか？」
サルデンは首を振った。
「残念ながら、何も……」
ベアトリッツは肩を落とした。
「そうか……」
どこかで生きていてくれれば良いが。

「そういえば、リリアナ様がご出産されたと聞きました。お祝い申し上げます」
リリアナは、ベアトリッツの次女だ。
「ああ、ありがとう」
リリアナは十代の頃、ある役者に熱を上げていた。ベアトリッツとグレアが、平民の男に入れこまないよう注意をしても、娘は聞き入れなかった。一度、ベアトリッツはその役者の劇を観に行ったことがある。娘を惑わす男が、どのような人物なのか、敵を視察する気持ちで観に行ったのに、すっかり演技に魅了されてしまった。
「楽屋を訪れるのを止めさせれば、観劇に行くのは許しても良いんじゃないか」
帰ってきたベアトリッツの言葉を聞き、妻は呆れかえっていた。しかし、グレアの杞憂をよそに、リリアナの劇通いは終わりを迎えることになった。
ふと、一月前に会った、生まれたばかりのリリアナの娘の顔を思い出した。
「孫というのは何人目でも可愛いものだな」
「そうでしょう。私も早く孫を持ちたいものです」
サルデンの長子はまだ十代のはずだ。
「なに、あと数年もすれば、そなたも孫を抱き上げているだろう」
ベアトリッツは窓の方へ視線を向けた。今日は良い天気だ。
「狩りにでも行こうと思っているが、どうかね。そなたの疲れ具合によるが」
サルデンは微笑んだ。
「是非ご一緒させてください」

※

太陽が沈むと、酒場が賑わいだす。アンデリートは一軒の酒場に入った。顔を赤らめた客たちが、楽しそうに酒を酌み交わしている。
客に気づいた給仕が、フェニールに近づく。
「お一人ですか？」
「杯は要らない」
給仕の顔から笑みが消えた。
「酒が零れて」
「血と混ざる」
賭博場に入るための合言葉だ。
「どうぞ、こちらへ」
給仕についていくと、店の目立たない位置にある簡素な扉の前へたどり着いた。おそらく、この扉の先が賭博場なのだろう。
扉の前には、見張りらしき男が立っていたが、アンデリートが給仕と一緒にいるのを見て、身をどかした。
扉を開けると飛び込んできたのは、酒場の半分ほどの

広さの空間と、首から血を流して倒れている死体だった。
一瞬顔が強張ってしまったが、緊張を相手に見せてはいけない。アンデリートはすぐに表情を消すと、後ろ手に扉を閉めた。
「ん？　新しい客だな」
バーテンダーのような恰好をした男が、カウンター先に立っている。おそらく賭博場の主人だろう。
「生憎まだ掃除が終わっていなくてね。それでも良ければ対応するが」
掃除とは、死体の片付けのことだろう。
「問題ない」
アンデリートは表情を変えずに答えた。
部屋を見渡すと、主人のほかに小間使いのような男と、剣を持った体格の良い男が立っているのが分かった。
賭博場の主人は薄く笑うと、部屋の隅に立っていた小間使いのような男に顎をしゃくった。
「片付けろ」
小間使いの男は、死体の両脇を掴むと裏口から出て行った。
「お客さん、ここのルールは知っているか？」
「ああ」
アンデリートは血を避けながら、椅子に腰かけた。
「欲しい物が手に入るが、自分の命を賭けなければならないのだろう？」
「その通り」
主人は親指ほどの大きさの札を取り出した。
「この札の裏には『生』と『死』が書かれている。生の札を選べば、お客さんの勝ち。死の札を選べば、あそこに立っている男に殺される。――どうだ、簡単だろう？」
賭博場の主人はおどけたように肩をすくめた。
二者択一ということか。確率は半分。アンデリートが生き残るか、ここで生涯を終えるかは、どちらも等しい可能性だ。
「ところで、お客さんは何をお望みで？」
「バイサ孤児院の売買記録が欲しい」
主人の顔から笑みが消えた。ここの賭博場の主人が仲介に立って、バイサ孤児院の子供の売買が行われているという情報は習得済みだ。
「……なるほど」
賭博場の主人は両手をカウンターにつけた。
「お客さんの望みは、それで良いんだな？」
「ああ」
「それなら、早く選びな」
右と左、どちらを選ぶか。どちらも同じ形、大きさに見える。